

読書の秋 大学生に読んでほしい3冊

何でもいいから本を読もう 人生は短い

中央大学法学部教授／法科大学院教授
法学博士 只木 誠氏



中大生にとって何度目の「読書の秋」だろうか。読書をこつとも充実の秋とするか、それとも巻き返しの秋か。全国大学生協連の2011年度調査によると1日の読書時間が「ゼロ」と答えた大学生が4割にも及んだ。只木誠教授(56)は言う。「何でもいいから本を読んでください。人生は短いです」。同教授が薦めてくれた3冊を紹介する。

(学生記者 渡辺紗希＝法学部3年)

【略歴】中央大学法学部卒。日本比較法研究所長。法学部では刑法を担当する。ゼミ生が先生の似顔絵入りのTシャツ(写真)を作るなど大人気の先生だ。ニコニコしてテンポ良く話す。次から次へと流れるようにたくさんの本や作者の名前が出てくる。現在オススメの作家は「弱者に対する優しい目線を感じる」ことから帯木蓬生氏。福島県出身。

●『チボー一家の人々』

ロジェ・マルタン・デュ・ガール著 白水社



カトリックで父家庭のチボー家。プロテスタントで母家庭のフォンタナン家。対照的な2つの家の物語だ。第1次世界大戦前後のフランスを舞台に登場人物の人間関係、成長が描かれている。

19年もの長い年月をかけて書かれた。作者はノーベル賞を受賞した。先生に「これは長いですけどね」と紹介された1冊。「家族とは、人生とは何なのかを教えてください。何のために生きるのか。学生時代には考えますよね」。じっくり腰をすえて、読んでみたい。

●『実践理性批判』

カント著 講談社

「かなり難しいけど、大学時代に読んでほしい」只木先生自身も大学時代に読んだ。
「正義とは何か」先生の専門である刑法の刑罰の考え方にも大きく関係している。
「ぜひ読んでほしい」

「カントの考え方は2つあります。宇宙を支配している自然法則と内なる道德律です。
ロマンティックですよ」

「常に新しいものを創造しなければならない中で、思索の重要性を感じます。社会のため
に何かをする、正義を実現するためにパッションは必要なものです」只木先生の口調
にも情熱がこもる。

●『こゝろ』

夏目漱石著 岩波文庫



漱石の晩年の代表作。近代的自我を取り扱う。読んだことのある人も多いのではない。朝日新聞に掲載され、「先生と私」「両親と私」「先生と遺書」の3部で構成される。

先生は中学から高校時代、折にふれて読んでいたという。「自分とは何なのか。自分と対話するとき、こゝろの手法が高校時代の私にあっていたのでしょうか」

大学時代も正月早々、何か面白いことないかな、と手に取った。「実家にも帰らず、みんなが楽しんでいるのを横目に斜に構えていたんでしょうね」と笑う。

「本の面白いところは読む年齢によって、読み方が変わるところですね。『なぜ漱石が明治初期に自我を発見したか。日本の社会構造が変わり、西洋文化との交流で日本人の精神にも変化が生まれてきたためなのだ』ということがだんだんと理解できる」

本は読めば読むほど味が出るようだ。これを機会に今まで読んだことのある本を読み直してみてもいいだろうか。

ダメ押し!

最後に只木先生から、大学生のみなさんに一言。

「何でもいいから本は読んでみてください。
(とくに古典)人生は短いです」

